

<全体分析>

試験時間 90分 (文学部 105分)

|   |
|---|
| <p><b>解答形式</b><br/>記述式 (一部マーク式)</p> <p><b>分量・難易 (前年比較)</b><br/>分量 (減少・やや減少・<span style="border: 1px solid black;">変化なし</span>・やや増加・増加)<br/>難易 (易化・やや易化・変化なし・<span style="border: 1px solid black;">やや難化</span>・難化)</p> <p><b>出題の特徴や昨年との変更点</b><br/>大問Ⅱでは、下線部の内容を英語で説明させる設問が初めて出題された。受験生にとっては負担増ということになるだろう。<br/>大問Ⅲの自由英作文の出題形式が「グラフの読み取りを元に記述させる」という、これまでになかったものだった。これ以外は従来通りの出題形式であるが、試験時間から考えると、記述量は非常に多い。</p> <p><b>その他トピックス</b><br/>なし。</p> |
|---|

<大問分析>

| 番号    | 区分                                      | 出題分野・テーマ                   | コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)   | 難易度 |
|-------|---|----------------------------|--|-----|
| I (A) | 英文解釈<br>(81 words /<br>下線部 40<br>words) | スポーツ参加と心<br>身の健康           | 英文の意味を把握すること自体はそう難しくはなかろう。<br>sports participation at the elite level は一瞬意味がよく<br>わからないかもしれないが、後続する文脈から自然に腑に<br>落ちるはず。with available research indicating ... はい<br>わゆる「付帯状況」で、ここでは and available research<br>indicates that ... に相当する。susceptible は「難語」の<br>部類に属するのだけれど、やはり前後の文脈からその意味<br>を割り出すことは十分可能だろう。いや、それよりもこの<br>語をきちんと覚えておく方がよほど重要ではあるが。                 | 標準  |
| I (B) | 英文解釈<br>(92 words /<br>下線部 47<br>words) | パントマイムによ<br>るコミュニケーション     | なかなか手強い素材だった。並列関係や修飾関係の判断<br>に迷うであろう箇所がいくつもあり、これらをすべてクリ<br>アすることに拘泥すると多大な時間を要することになる<br>だろう。この難度なら、「大体意味は通じている」ところ<br>まで答案を追いかけてさっさと別の設問に移る、という<br>戦略も肝要ではないだろうか。答案の成否を左右するであ<br>ろうポイントは、trace / populated / “virtually” present<br>に関する意味判断。いずれも、「パントマイム」のパフォー<br>マンスを頭に思い浮かべながら行う必要があるだろう。   | 難   |
| II    | 読解総合<br>(711words)                      | インフラとしての<br>自然が持つ経済的<br>価値 | 論旨の一貫した標準的な英文である。新傾向の設問も見ら<br>れた。設問(1)は従来通り語句レベルのパラフレーズ問題で<br>平易。設問(2)では、やや長めのフレーズの内容理解が問わ<br>れた。見慣れない形式ではあったが、設問としては標準レ<br>ベル。設問(3)は新形式の設問で、下線部の内容を 40~50<br>語程度の英語で説明する。内容把握力に加え、英文構成力<br>も求められた。苦戦した受験生も多いだろう。設問(4)と(5)<br>は日本語で記述する説明問題であったが、何をどこまで書<br>けばよいのか判断に迷った受験生も多いかもしれない。解<br>答用紙のスペースがヒントになる。設問(6)はタイトル選択<br>問題。本文全体の趣旨を問うタイプの設問は大阪大学の読<br>解問題では定番。 | やや難 |

|          |       |                   |  |     |
|----------|-------|-------------------|--|-----|
| III      | 自由英作文 | 日本の博士号取得者数の推移について | 世界の6ヵ国における博士号取得者数の推移を示すグラフから日本の置かれた状況を読み取って記述し、さらにその状況に関する原因分析あるいは改善案を記述することを求める設問で、従来にはない形式だった。もっとも、このような形式の設問は多くの大学で出題されており、特に「変わった設問」というわけではない。「21世紀に入ってからからの阪大で初めて」というだけの話だ。今回の設問では2つのことを記述することが求められたわけだが、十分な情報を示しながらこれらをわずか「80語程度」の中に収めるのはかなり厳しい。表現をコンパクトにまとめる工夫が相当に必要だったことだろう。 | やや難 |
| IV(A)    | 英作文   | 文章を語る「形」          | ある意味「阪大らしい」、「厄介な日本語」を英訳させる設問だった。文中にある「それをどう伝えるか」というパートは、文字通りに読むと「それをどのように語るか」を意味しているように思われることだろう。だがそのように解釈すると、下線部全体の文脈が整合しなくなってしまう。下線部以外のパートも含めて文脈全体に目を凝らし、「それをどう伝えるかの問題」を前後の文脈と論理整合するよう解釈しなければならなかった。豊富な英作文学習経験が求められる設問だったと言える。上記の一点を除けば、そう難度の高い設問ではない。                             | 標準  |
| IV(B)(イ) | 英作文   | スピーチのコツ           | これも、日本語に対する能動的な解釈を求める設問。日本語は唐突な形で始まるが、全文をしっかりと読み込んで「どのようにスピーチを進めるべきか」が述べられていることを炙り出す必要がある。そうしないと文中の「着地点」や「美しい終わり方」、また「相手」が具体的に意味するところが見えてこない。(A)と同様、このハードルさえクリアすれば全体の訳出は標準的難度だったと言えよう。   | 標準  |
| IV(B)(ロ) | 英作文   | 「食事」は「栄養摂取」ならず    | 下線部前後にも十分な文脈があり、日本語の解釈に特段の難はない。「確かに食に目的を設定するならばその目的は栄養摂取である」でも、「設定する」で悩んだ受験生はあまりいないだろう。「食べる目的は何かと問われれば、確かに回答は栄養摂取だろう」などと読み換えれば、訳出は容易だ。「食がその目的しか追求しないようになったら」も、「栄養目的のためだけに食べるなら」などと読み換えることで、平易な英語表現で訳出できよう。   | 標準  |

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## <学習対策>

どの設問にも、英語であれ日本語であれ、文章が伝えようとしているメッセージを正確に探り出す能力を試そうとする姿勢が貫かれている。同時にまた、正しい英語学習の過程で身につくであろう知的教養の有無も試していると考えられる。これらの要求に応えるには、学習した素材を何度も復習し、自分自身の中にある英語理解を「深い」ものにしていく必要がある。「手っ取り早く設問に答える方法」を追いかけようとするのでは、求められている資質は獲得できない。むしろ、「時間のかかる」学習こそが、大阪大学合格への一番の近道であることを実感してもらいたい。